井尻B遺跡27

－井尻Ｂ遺跡第４２次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第１３０７集

調査区全景（東から）

２０１７

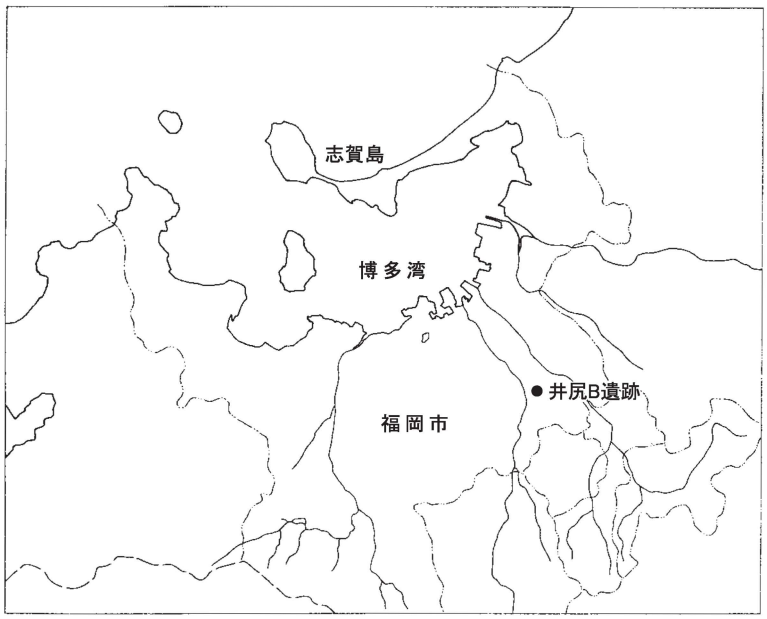
福岡市教育委員会

井尻B遺跡27

（いじりBいせき）

－井尻Ｂ遺跡第４２次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第１３０７集



調査番号　１４３４
遺跡記号　IGB－42

２０１７

福岡市教育委員会

れ い げ ん

1．本書は、福岡市教育委員会が専用住宅の建設に先立って、平成 26（2014）年度に、福岡市南区井尻一丁目 707 番 6 で緊急発掘調査した井尻Ｂ遺跡第 42 次調査の発掘調査報告書である。
2．本書に使用した方位は、すべて磁北方位である。
3．本書に掲載した遺構と遺物の実測および製図は、小林義彦が作成した。
4．本書に掲載した遺構と遺物の写真は、小林が撮影した。なお、全景写真は、２分割して撮影した東西両区の写真をＣＧで合成した。
5．本書の執筆・編集は、小林が行った。
6．本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：1434	遺跡略号：IGB－42	分布地図番号；25－0090
調査地籍：福岡市南区井尻１丁目 707-6		
工事面積：68㎡	調査対象面積：68㎡	調査実施面積：66㎡
調査期間：2014年12月9日～12月19日		

序

はるか二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指しさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、南区井尻一丁目 707 番 6 で専用住宅の建設に先立って実施した井尻Ｂ遺跡第４２次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、竪穴住居と掘立柱建物からなる弥生時代の集落跡が発見されました。井尻丘陵の北西端に立地する弥生時代の集落域の発見は、井尻の丘陵上に拡がる弥生時代の集落域の消長を知る上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会

教育長　星子　明夫

本文目次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
　１．発掘調査にいたるまで …… 1
　２．発掘調査の組織 …… 1
　３．立地と歴史的環境 …… 3
Ⅱ．調査の記録 …… 7
　１．調査の概要 …… 7
　２．竪穴住居 …… 7
　３．掘立柱建物 …… 9
　４．土　坑 …… 10
　５．その他の遺構と包含層の遺物 …… 11
Ⅲ．おわりに …… 11

挿図目次

Fig. 1　周辺遺跡分布図(1／25,000) …… 2
Fig. 2　井尻Ｂ遺跡位置図(1／6,000) …… 4
Fig. 3　井尻Ｂ遺跡第４２次調査区位置図(1／1,000) …… 5
Fig. 4　井尻Ｂ遺跡第４２次調査区周辺現況図(1／400) …… 6
Fig. 5　第４２次調査区遺構配置図(1／100) …… 7
Fig. 6　１１号住居実測図(1／60) …… 8
Fig. 7　１１号住居出土遺物実測図(1／2･1／4) …… 8
Fig. 8　１２号住居実測図(1／60) …… 9
Fig. 9　１２号住居出土遺物実測図(1／2･1／4) …… 9
Fig. 10　１号建物実測図(1／80) …… 10
Fig. 11　１号建物出土遺物実測図(1／4) …… 10
Fig. 12　１７・１８号土坑実測図(1／30) …… 11
Fig. 13　ピット･包含層出土遺物実測図(1／2) …… 11

図版目次

表　紙　調査区全景(東から)
PL. 1　1)調査区全景(北から)　2)11･12号住居(東から)
PL. 2　1)11号住居(北から)　2)12号住居(北から)
PL. 3　1)12号住居遺物出土状況(南東から)　2)12号住居台付鉢･小型丸底壷出土状況(東から)
PL. 4　1)12号住居甕出土状況(東から)　2)15･17･18号土坑(北から)
PL. 5　1)1号建物(北から)　2)1号建物Ｐ１土層断面(西から)
　　3)1号建物Ｐ２土層断面(西から)
PL. 6　出土遺物(縮尺不同)

表目次

Tab. 1　井尻Ｂ遺跡調査一覧表 …… 12

Ⅰ．はじめに

１．発掘調査にいたるまで

井尻Ｂ遺跡は、福岡平野を北流する那珂川に沿って春日市の須玖岡本から井尻・五十川・那珂・比恵へとつづく低丘陵上に立地している。この那珂川以南の地は、昭和 30（1955）年代まで農業を基盤とする村々が点在するのどかな田園地帯であった。しかし、昭和 40（1965）年代以降の高度経済成長期に郊外の市街化が急速に進み、往年の田園風景は次第に失われつつある。

井尻の地は、春日市の岡本から那珂・比恵へと長く続く低丘陵の中ほどに位置する。この地は、北へ行けば竹下、南は春日、東は板付から月隈、西へは曰佐から老司への分岐点にあたり、西鉄大牟田線の井尻駅周辺は、交通の利便性に長じた地として早くから本村を中心に住宅域が拡がっていた。そのために村中は、道幅の狭い道路が網の目のように延びている。しかし、井尻御供所線の整備に伴って周辺の様相は一変し、低中層の共同住宅建設が増加している。

第 42 次調査区の周辺では、井尻御供所線の道路新設に伴って発掘調査が実施され、小型仿製鏡や銅鏃、銅戈、銅矛などの鋳型やそれらの鋳型で製作された青銅製品のほかに坩堝などが出土しており、青銅器やガラス製品を製作する集落域が拡がっていることが確認されている。

平成 26（2014）年 11 月 11 日に南区井尻一丁目 707 番 6 地内において専用住宅の建設が計画され、遺跡の存否確認の照会が埋蔵文化財審査課（現埋蔵文化財課）に提出された。照会地は、井尻Ｂ遺跡として周知された埋蔵文化財の包蔵地内にあり、その周辺には第 7・10・15 次調査区があることから申請地内には弥生時代の遺構が拡がっている可能性が予測された。そこで同年 11 月 20 日に確認調査を実施してその存否を確認したところ、竪穴住居や溝が重複しながら全域に拡がっていることが確認された。これを受けて現状保存のための協議を行ったが、建設計画が進んでいると同時に基礎杭が深度 5.3m にも及ぶことから設計変更は不可能であった。そのために建築物によって破壊される範囲を速やかに発掘調査して記録保存を図ることになった。

発掘調査は、平成 26(2014) 年 12 月 9 日に開始し、弥生時代中期の竪穴住居や大型の掘立柱建物、土坑などを検出して 12 月 19 日に無事終了した。これらの成果は、土地所有者様のご理解と指導、助言を頂いた埋蔵文化財課の先輩諸氏および寒風吹き荒ぶ悪条件の中で発掘作業に従事された方々の労苦に負うところが大きい。ここに記して感謝の意を表します。なお、発掘調査は、専用住宅の建設に伴う事前調査のために国庫補助事業として実施した。

２．発掘調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　埋蔵文化財調査課（現埋蔵文化財課）課長　常松幹雄（26・28 年度）
　　同課調査第２係長　加藤隆也（28 年度）　榎本義嗣（26 年度）
調査庶務　埋蔵文化財審査課（現埋蔵文化財課）管理係　横田　忍（26・28 年度）
調査担当　埋蔵文化財課（現埋蔵文化財課）　小林義彦（26・28 年度）
調査・整理作業　伊藤美伸　坂梨美紀　知花繁代　田中朋香　土斐崎孝子　西田文子　濱フミコ
　　日高芳子　北條こず江　増田ヒロ子　松下さゆり　森田裕子　渡部律子

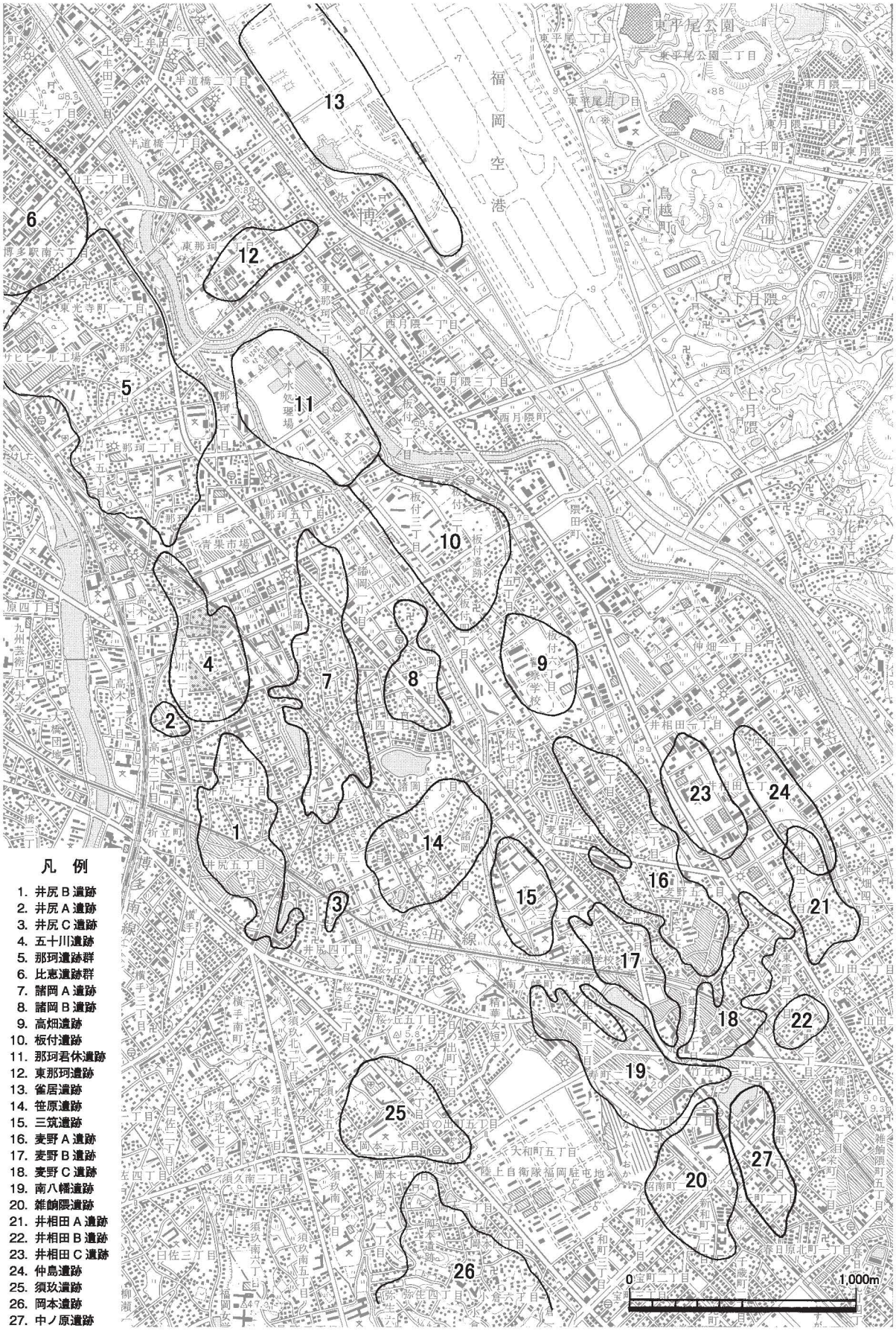


Fig.1　周辺遺跡分布図(1／25,000)

3．立地と歴史的環境 (Fig.1・2)

井尻Ｂ遺跡のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘にむかって開口する博多湾に面した沖積平野である。

この福岡平野の中央部を北流して博多湾に注ぐ那珂川と御笠川の間には、標高11～18mの低丘陵が北の博多湾にむかって長く断続的に延びている。この春日丘陵と総称される洪積丘陵は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層に阿蘇山の噴火によるAso―4火砕流によって形成された八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積する火砕流台地で、台地内には小さな開析谷が幾筋も彎入して複雑な地形をなしている。この春日丘陵は、奴国王の王墓地と推定される岡本遺跡のある須玖岡本から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと連なって博多湾の海岸砂丘に至る。これらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿と複合的に重なって展開している。殊に、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

井尻Ｂ遺跡は、春日丘陵が標高を下げながら那珂・比恵丘陵へと続く標高は11～18mの低平な台地の鞍部に立地している。この井尻Ｂ遺跡については、古くには江戸時代の国学者青柳種信の著書「筑前國續風土記拾遺」の那珂郡井尻村の条に、「熊野権現の銅矛鋳型」や「大塚」、「古瓦多く出、昔大寺など有りし」などの記述がある。また、大正13年～昭和2年には九州帝国大学の中山平次郎博士が甕棺墓や竪穴のほか瓦の包含層について報告され、寺院基壇の整地層の可能性を指摘され、早くから考古学界には知られていた。この井尻Ｂ遺跡おける発掘調査は、昭和56（1981）年の第1次調査に始まり、以来43地点で調査が実施されて、丘陵上における遺構の拡がりや消長が次第に明らかになりつつある。

ここで井尻Ｂ遺跡を概観すると、その初現は後期旧石器時代に始まり、第2次調査や12次調査で細石刃やナイフ形石器、石核が出土している。その後、縄文時代は長きに亘って人跡は途絶える。

弥生時代になると、台地の北西端で弥生時代草創期の夜臼式や板付Ⅱ式の土器が散見される。中期には貯蔵穴群や甕棺墓などが拡がっているが、密度的には比較的散漫な分布を示している。後出する遺構から、この期の遺物が大量に出土することを勘案すると多くの遺構は削平されて消失した可能性も考えられる。須玖岡本遺跡を頂点とする奴国全盛の後期になると、竪穴住居や掘立柱建物を中心とする集落遺構が丘陵の全域に濃密な拡がりを見せ、一大拠点集落としての様相を示す。なかでも丘陵の中央尾根線上に位置する 6 次調査や 11 次調査、17 次調査では、小型仿製鏡や銅鏃、銅戈、銅矛、ガラス勾玉などの鋳型や小型仿製鏡、小銅鐸、銅鏃などの青銅製品と坩堝や青銅滴付着土器など青銅器やガラス製品の製作に不可欠な遺物が出土している。このことは井尻丘陵に青銅器やガラス製品などを生産する工房的集落があったことを示唆するものである。一方、井尻Ｂ遺跡から南東へ1kmの岡本丘陵には、奴国王墓を擁する須玖岡本遺跡があり、奴国の中心域として広く知られている。この須玖岡本遺跡には、奴国王墓や甕棺墓群を主体とする墳丘墓が点在し、その前面に拡がる裾野の沖積地には、青銅器の工房跡である永田遺跡や坂本遺跡、黒田遺跡のほかガラス製品工房跡である五反田遺跡がある。南西方にはガラス勾玉鋳型や小型仿製鏡が出土した弥永原遺跡があり、その東には後漢鏡を副葬した曰佐遺跡が隣接している。また、井尻Ｂ遺跡から北へ続く丘陵上の那珂遺跡や比恵遺跡でも銅戈の鋳型や取瓶、中子などの鋳造用具が出土している。これらのことから須玖岡本遺跡を中心として北へ延びる井尻～五十川～那珂～比恵へと続く丘陵上には、青銅器やガラス製品を鋳造する有力な拠点的集落が丘陵ごとに展開していたものと推考される。このように青銅器やガラス製品を鋳造する奴国の有力な拠点的集落として丘陵上の各所に展開した集落群も古墳時代初めを境として稀薄になる。この期の墓域としては、土壙墓や木棺墓、石蓋土壙墓などが2次調査や27・34次調査で検出され

ている。また、これに先行する中期の甕棺墓群が、16・17・27・34 次調査など丘陵の北側で検出されている。

古墳時代になると、５世紀後半には丘陵南側の 2・5 次調査で墳径が 25m の円墳（井尻Ｂ１号墳）が造営されている。この円墳は、前方後円墳の可能性も指摘されており、「筑前國續風土記拾遺」に記された「大塚」を想起させる。この間途絶した集落域は、６世紀後半～７世紀に掘立柱建物を中心に再び展開するが、その有り様は比較的疎らである。７世紀後半～８世紀前半には、丘陵中央部の 1・3・17 次調査で百済系単弁瓦を初めとする丸瓦や平瓦が、11 次調査では「寺」とヘラ描きされた須恵器皿が出土しており、寺院跡（井尻廃寺）の存在が指摘されている。北の那珂、比恵遺跡でも老司式の古代瓦を伴う溝などが検出されており、寺院あるいは官衙的施設の存在が想起されている。また、東方の御笠川と諸岡川に挟まれた低丘陵上には大宰府から水城の東門から延びた官道に沿って高畑廃寺の存在が想定されている。一方、那珂川を挟んだ左岸には銅製の箸や匙、富寿神寶などが出土した三宅廃寺があり、平野内には幾つかの古代寺院が建立されていたものと推考される。

これ以降、８世紀後半から古代末、中世の遺構はきわめて稀薄になるが、開析谷を隔てた北の五十川遺跡～那珂丘陵には多く見られる。これは井尻丘陵の集落域が、農耕を生産基盤とする集落として変容し、続いて行ったものと考えられる。

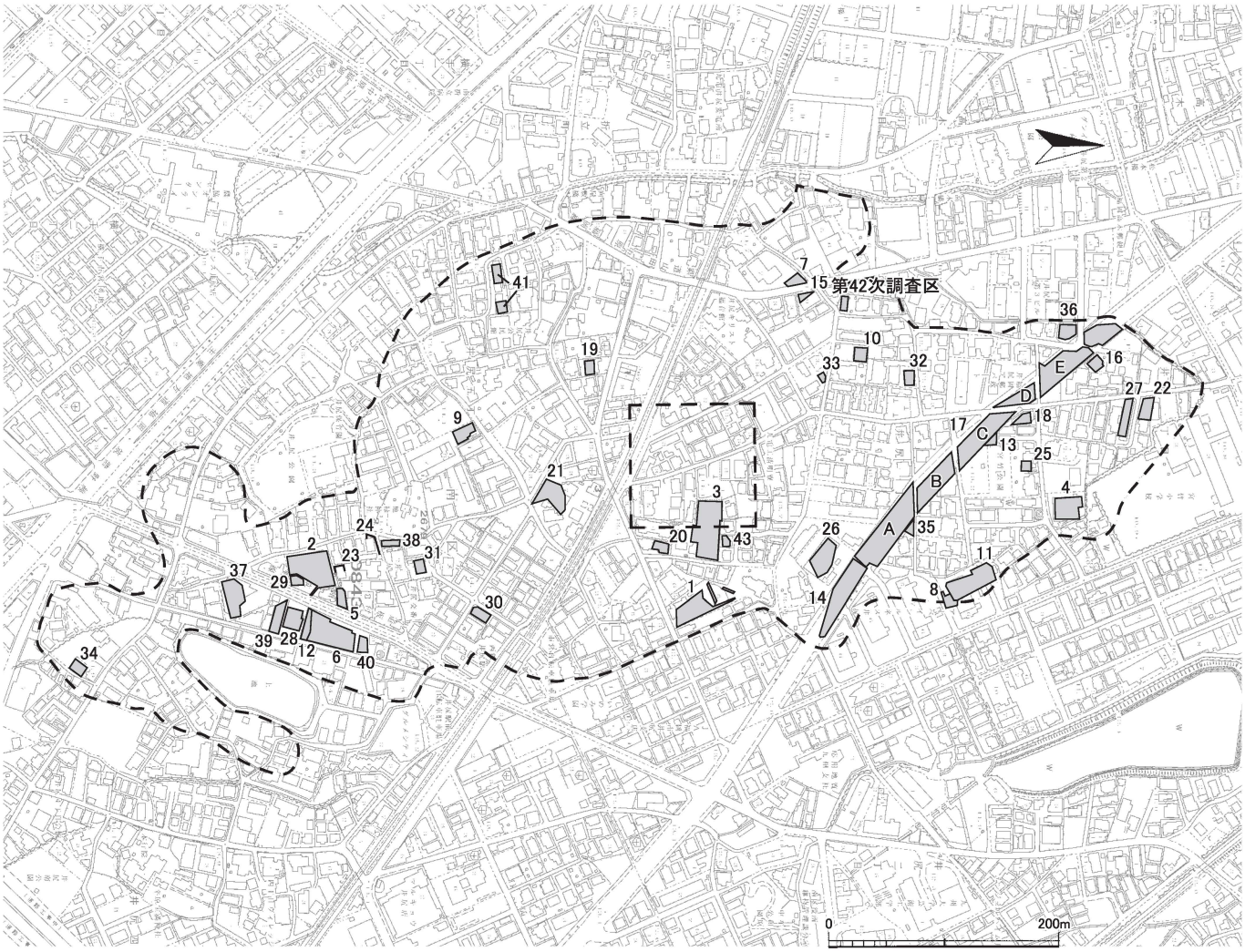


Fig.2　井尻B遺跡位置図(1／6,000)

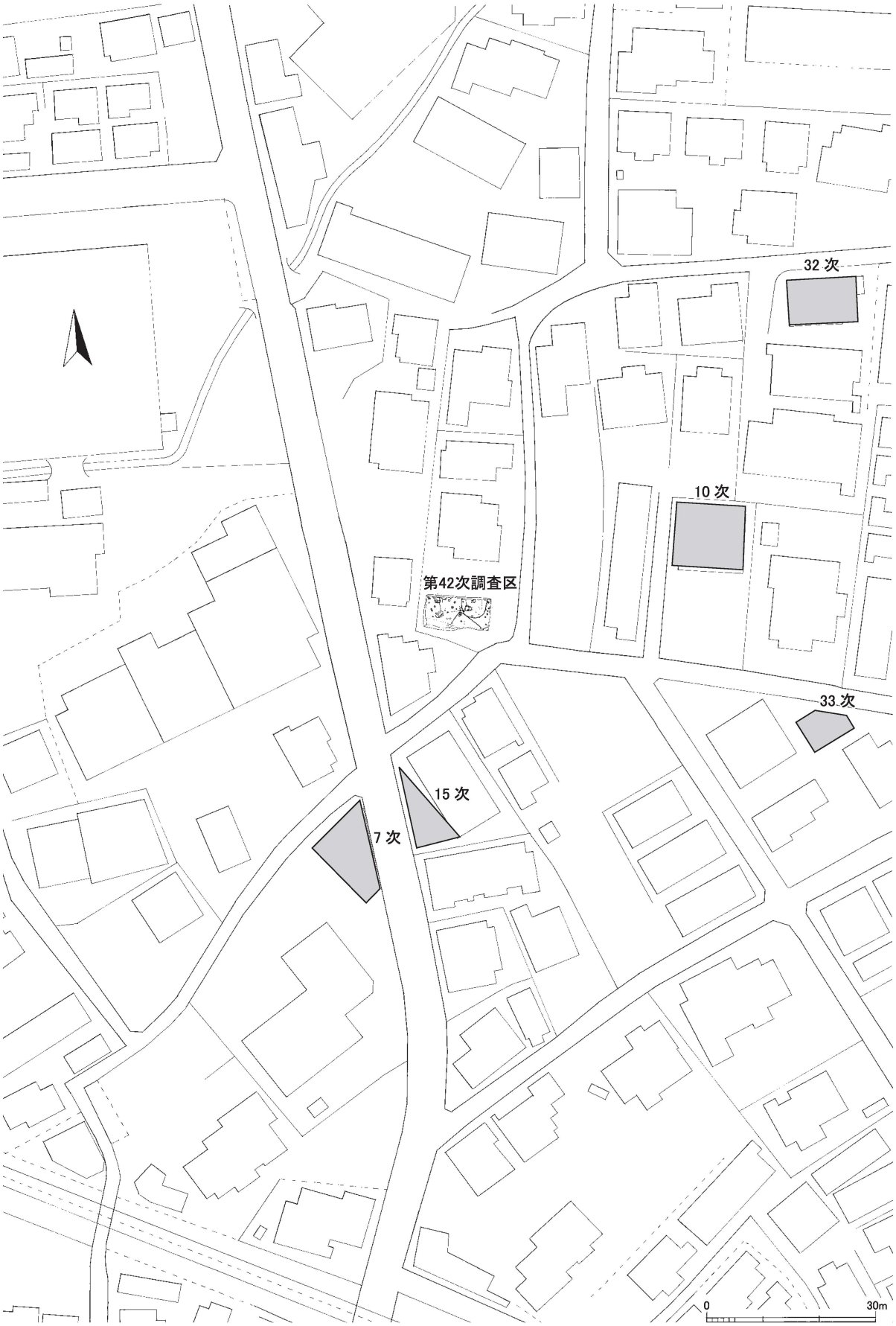


Fig.3　井尻B遺跡第42次調査区位置図(1／1,000)

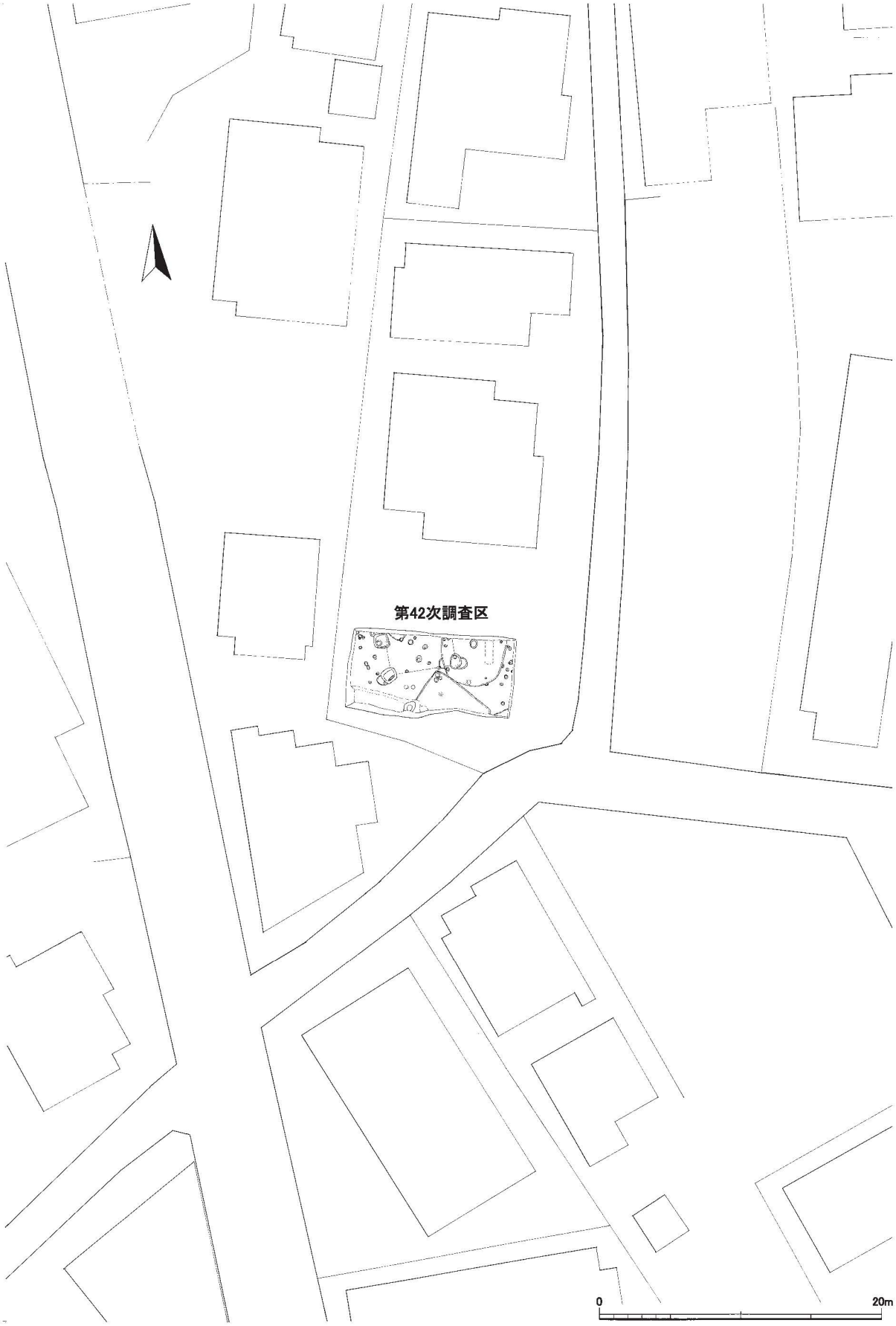


Fig.4　井尻B遺跡第42次調査区周辺現況図(1／400)

Ⅱ．調査の記録

1．調査の概要　(Fig. 3・4・5)

井尻Ｂ遺跡は、福岡平野の西縁を北流する那珂川の右岸に沿って観音山の小山塊から発する春日丘陵が、標高を減じながら那珂・比恵へと続いている。井尻Ｂ遺跡は、奴国王墓とされる須玖岡本遺跡から 1,000m ほど北にあり、その北には五十川から那珂遺跡群、比恵遺跡群が低平な台地が続いている。第 42 次調査区は、この南北に長く延びる井尻台地の北西縁に位置し、すぐ西には、小さな開析谷が北から弯入している。本調査区のすぐ東には第10次調査区が、南には第7･15次調査区が隣接してあり、弥生時代から古墳時代の井戸や土坑と溝のほかに古代の掘立柱建物などが検出されており、周辺域には弥生時代から古墳時代・古代の集落域が拡がっている可能性が想定される。

試掘調査では、表土層下 20cm で竪穴住居や溝が検出され、弥生時代の集落域が拡がっていると想定されていた。しかしながら、建設予定の建物に沿って面的に調査範囲を拡げると弥生時代中期の竪穴住居とそれに先行する大型の掘立柱建物および古墳時代初めの竪穴住居を検出した。南北に延びる井尻丘陵の北西縁に小さく突き出した小丘陵周辺で集落の主体となる竪穴住居の検出は初めてであり、該期の集落域が拡がっていることが明らかになった。

2．竪穴住居（ＳＣ）

１１号住居　SC−11　(Fig. 6・7　PL. 1・2・6)

１１号住居は、調査区の東部に位置する。西南の隅壁は 12 号住居に切られ、床面上からは住居によって削平された 1 号建物や 17・18 号土坑が検出された。住居の北半部は調査区外に拡がっているが、平面形は、短軸が 455cm、現長が 340cm の長軸は 600 ～ 650cm に復原される楕円形プランをなそう。深さが29cmの壁面が急峻に立ち上がり、周溝は巡っていない。壁下には、直径が 17 ～ 30cm、深さが 10 ～ 22cm の円～楕円形プランの柱穴が壁面に沿って 125cm と 170cm の間を置いて 5 本が巡っている。P4 と P5 の間の柱穴は検出できなかったが、125cm と 170cm のスパンで存在したものと考えられる。床面は、中央部が浅く窪む凹レンズ状をなし、壁際が 3cm、中央部が 8cm ほどの厚さに黄褐色粘土を突き固めて貼床としていた。覆土は、黒褐色～暗黒茶褐色土の単一層で、遺物は、床面上から弥生中期の甕や高坏･器台片の外に土師器甕片がわずかに出土した。

1～3は、上縁部を平坦に整えた逆Ｌ字状

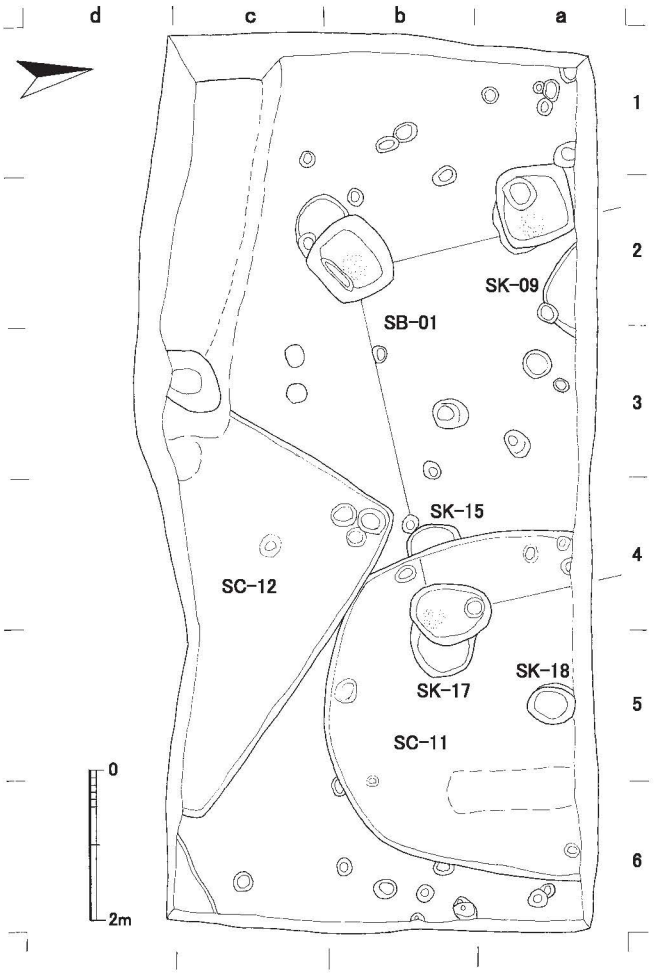


Fig.5　第42次調査区遺構配置図(1／100)

口縁の甕で、胴部は倒卵形をなそう。口径は1が29cm、2は26.6cm、3は25cmである。4は、底径が6cmの甕底部である。いずれも胎土は粗く、細～中砂粒を多く含み、色調は濃赤褐色～淡明赤橙色。1と4には2次被熱による赤変がある。5は底径が10cmの器台である。器肉は薄く、筒部はスマートに立ち上がる。胎土は粗く、多くの細～石英粗砂粒と僅少の雲母微細を含む。色調は淡明赤褐色で、2次被熱による赤変がある。

6は、砥石片である。砥面は表裏の2面で良く研ぎ込まれている。

１２号住居　SC-12

(Fig. 8・9　PL. 1・2・3・4・6)

１２号住居は、調査区の南東部に位置し、北隅壁は１１号住居の南西壁を切っている。全体に削平が著しく、南半部は調査区外に拡がっているために全容は明らかでないが、北壁長が490cmを測り、一辺が490～550cmほどの方形プランをなそう。全体に削平が著しく、壁高は17cmと浅いが、壁下には幅が2～3cm、深さが4～5cmほどの周溝とは云い難い不揃いな溝状の掘り込みが巡っている。機能的には、壁面の崩落防止の板材を打設した可能性も考えられなくはない。北西隅には、壁面から120cmほどの距離に直径が25cm、深さが55cmの柱穴がある。このことから主柱穴は、柱間が240cmほどの4本柱と考えられる。床面はほぼフラット

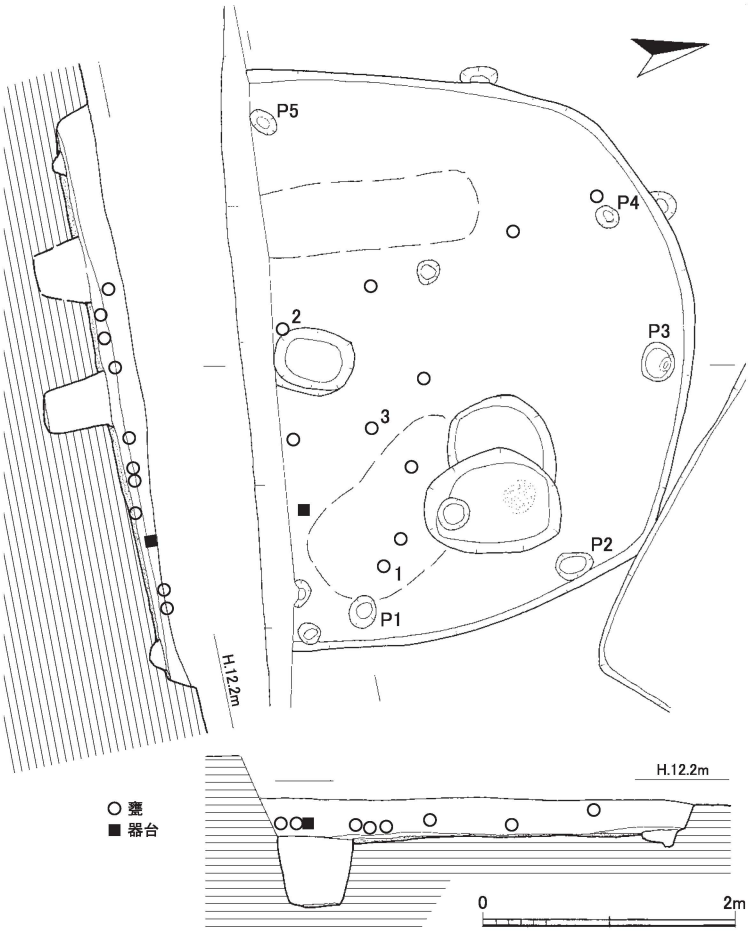


Fig.6　11号住居実測図(1／60)

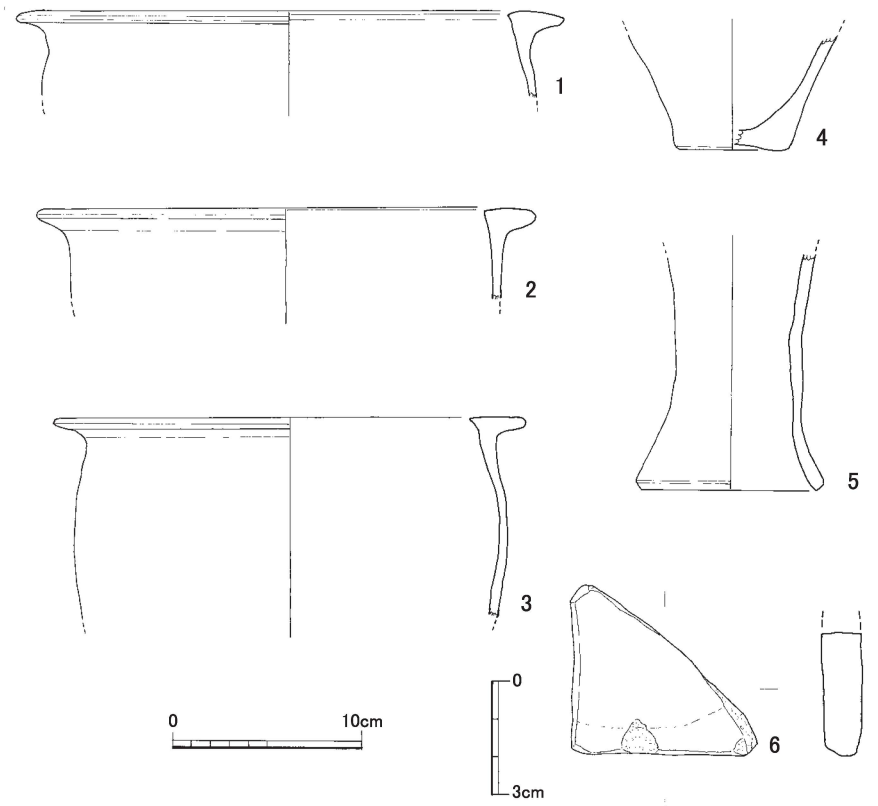


Fig.7　11号住居出土遺物実測図(1／2・1／4)

で、黄褐色粘土を5cmほど突き固めて貼床としている。また、北壁際の中央部には、焼土塊と炭片が散乱し、その周辺からは土師器小型丸底壷や甕、高坏片が比較的まとまって出土した。覆土は、暗茶褐色土の単一層である。

7･8は、小型丸底壷である。7は口径が8.5cm、器高が8.3cmで、口縁部はやや肩の張った球形の胴部から短くストレートに外反する。口縁部はヨコナデ、内面は指頭押圧ナデ、外面はナデ調整。胎土は精良で、微細～細砂粒をわずかに含む。淡黄橙色。8は口径が9.6cm、器高は7.5cmである。口縁部は、偏球形の胴部からストレートに外反して延び、端部を上方に小さく摘み上げている。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部内面は、底面が指頭押圧ナデ、上半部は粘土紐の幅に沿って押圧後にヨコナデ、外面はナデ。胎土は精良で、微細～小砂粒と赤鉄鉱塊をわずかに含む。明橙色。9は、口径は15.8cm、台径が6.6cm、器高が9.4cmの台付鉢である。ストレートに立ち上がる体部はわずかに内弯する。調整は、口縁部と台部がヨコナデ、胴部内面は指頭押圧ナデ、台部内面はナデで鉢と台の接合面は強い指頭押圧ナデである。胎土は良質であるが、比較的多くの微細～小砂粒と僅少の石英粗砂粒を含む。淡明赤橙色。10は、底径が7cmの甕である。胴部内面は指頭押圧ナデ。胎土は良質であるが、多くの微細～細砂粒と少量の石英小～中砂粒を含む。色調はややくすんだ淡橙色。

11は、砂岩質の砥石である。砥面は、表裏と側面の３面にあり、良く研ぎ込まれていることから仕上砥と考えられる。12は、石庖丁片。

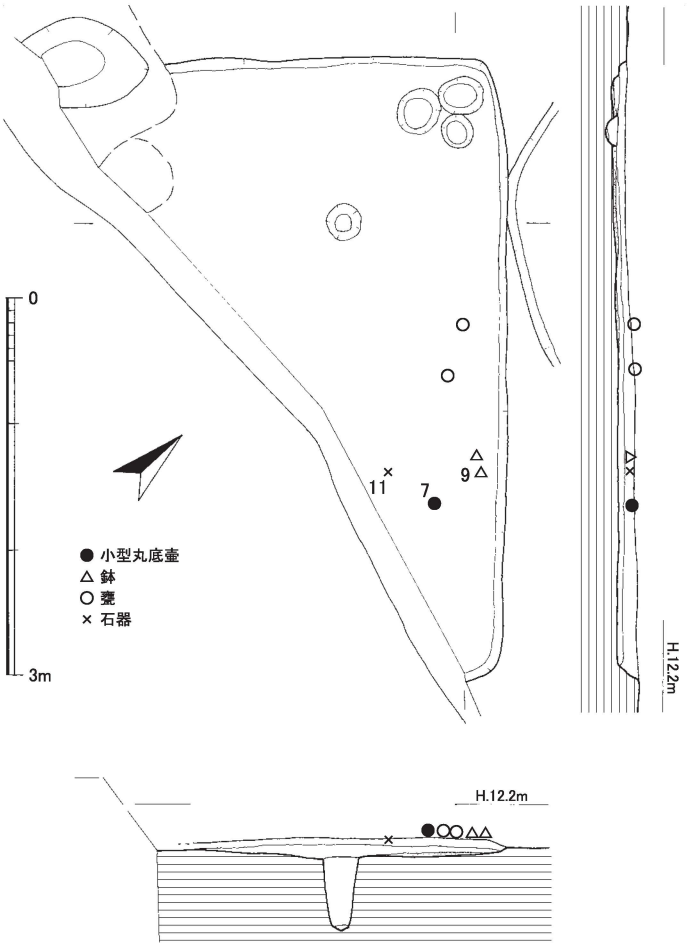


Fig.8　12号住居実測図(1／60)

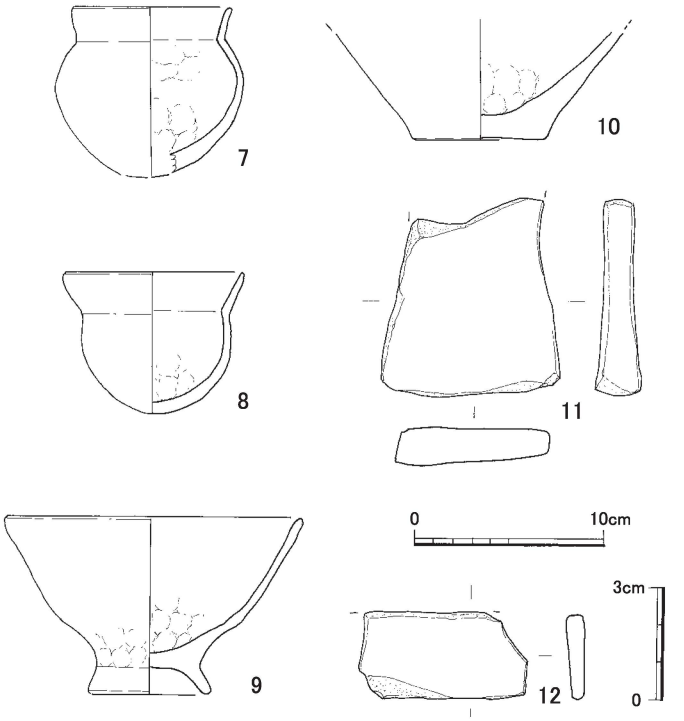


Fig.9　12号住居出土遺物実測図(1／2･1／4)

３.掘立柱建物(ＳＢ)

１号建物　SB-01

(Fig. 10・11　PL. 5・6)

１号建物は、調査区の西部に位置する東西棟の建物で、南東側の柱穴(P3)は、

11号住居に切られている。建物は、北側の調査区外に拡がっており規模的には判然としないが、P1とP2の柱間が250cm、P2とP3の柱間が500cmを測る。現状では桁行長が500cm、梁行長が250cmの1間×1間の建物であるが、状況的には梁行長が2間の1間×2間の建物が想起されるが、桁行長も2間の2間×2間の建物の可能性もなくはない。柱穴の平面形は、P1とP2が100cm×105cmの方形プランで、深さが81～83cmの壁面は急峻に立ち上がる。P3は、長径が110cm、短径が80cmの楕円形プランを呈し、急峻に立ち上がる壁面の深さは62cmである。いずれの柱穴からも東壁に添って直径が30～35cmの柱痕が検出された。また、P1とP3の底面には、深さが10～15cmの柱痕と同径の小ピットがあり建て替えの可能性が考えられる。遺物は弥生土器や土師器片がわずかに出土した。

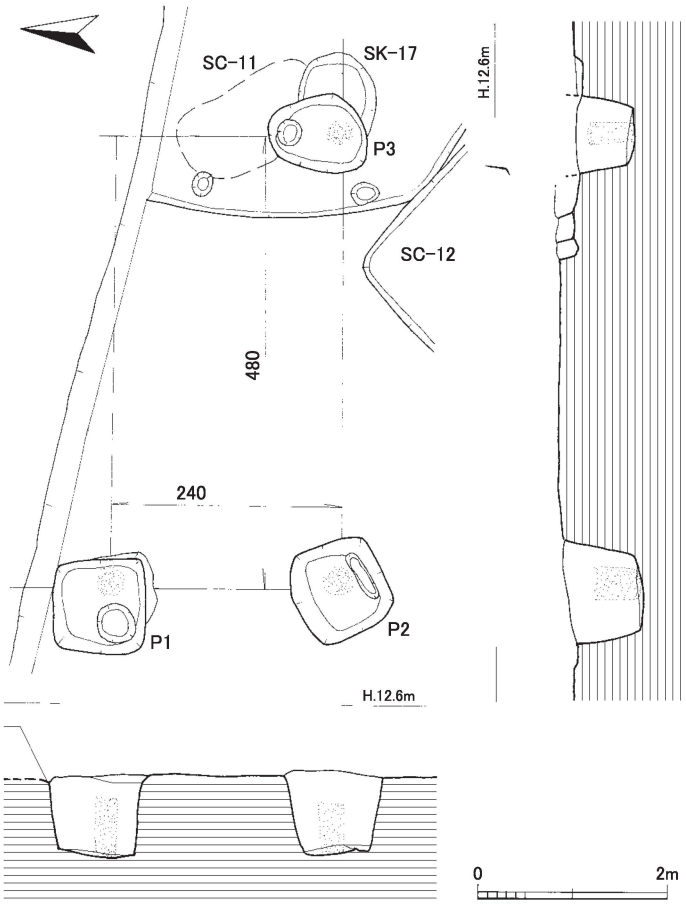


Fig.10　1号建物実測図(1／80)

13は、口径が14.4cmの甕である。口縁部は大きく外反し、胴部は倒卵形をなそう。口縁部はヨコナデ、胴部内面は押圧後にナデ調整。胎土には、比較的多くの細～石英小砂粒と僅少の赤鉄鉱片を含む。内面はややくすんだ淡赤橙色、外面は赤橙色。14は、台付甕で台形は11.4cm。台部は反りぎみに大きく開き、2次被熱による赤変がある。内底面は指頭押圧ナデ、台部はヨコナデ～押圧ナデ。胎土はやや粗く、多くの細～石英小砂粒のほかに僅少の雲母微細を含む。内面はくすんだ黄橙色、外面は明赤橙色。

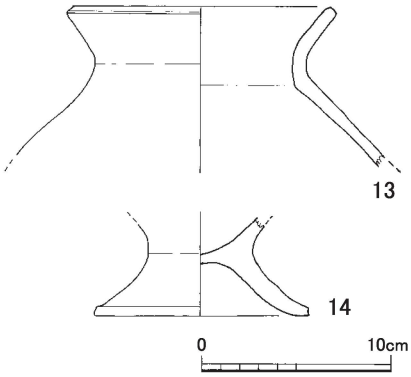


Fig.11　1号建物出土遺物実測図(1／4)

4．土　坑　(SK)

9号土坑　SK−09　(Fig. 5　PL. 6)

9号土坑は、調査区の北西部に位置し、すぐ西には1号建物のP1がある。土坑の大半は調査区外に拡がっているために判然としないが、長辺が140cm、短辺が100～110cmほどの長方形プランに復原されようか。壁面は、削平を受けて13cmと浅く、東小口壁はやや緩やかに、南側壁は急峻に立ち上がる。坑底は、中央部がわずかに浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、暗～濃茶褐色土の単一層で、弥生甕や高坏片がわずかに出土した。

15号土坑　SK−15　(Fig. 5　PL. 4)

15号土坑は、調査区の中央部に位置し、西小口壁を残して大半は11号住居に削平されている。平面形は、短辺が76cmの長方形プランを呈し、長辺は80～100cmほどに復原されようか。坑底はフラットで、深さは20cmの壁面はやや緩やかに立ち上がる。覆土は、濃茶褐色土の単一層である。

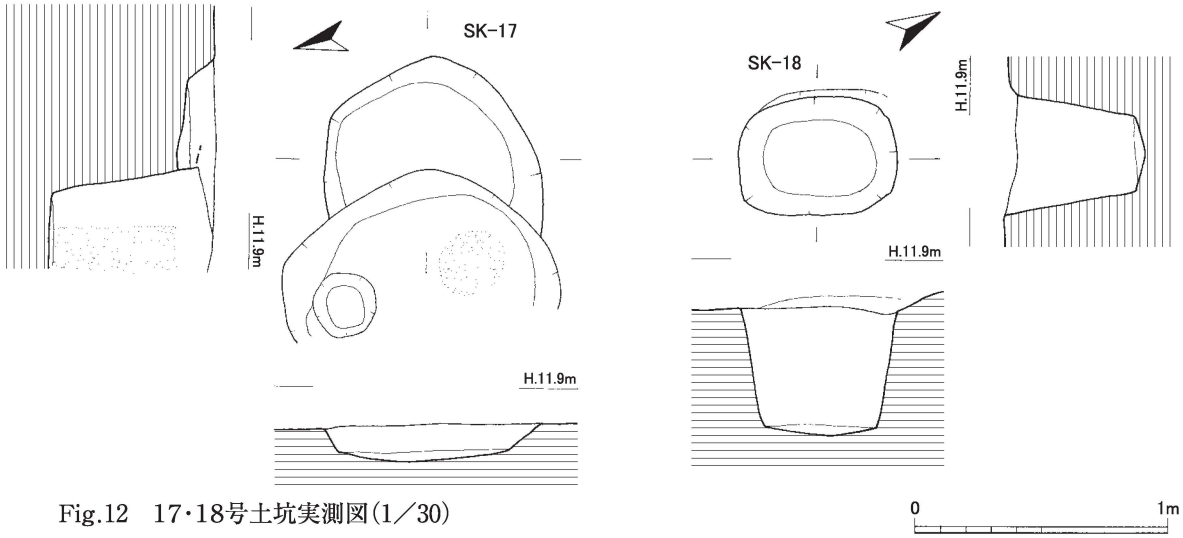


Fig.12　17･18号土坑実測図(1／30)

１７号土坑　SK−17　(Fig. 12　PL. 4)

１７号土坑は、調査区東部の 11号住居内の南西部にあり、その西半は、1号建物の P3に削平されており、１号建物や 11号住居よりも古い。平面形は、短辺が 85cmで長辺は 100〜110cmの隅丸長方形プランに復原されよう。主軸方位をN-75°-Wにとる。壁面の深さは 15cmと浅く、北側壁は急峻にいく、また南側壁はやや緩やかに立ち上がる。坑底は、中央部が凹レンズ状に窪む舟底状の断面形をなしている。覆土は、黒褐色土の単一層である。

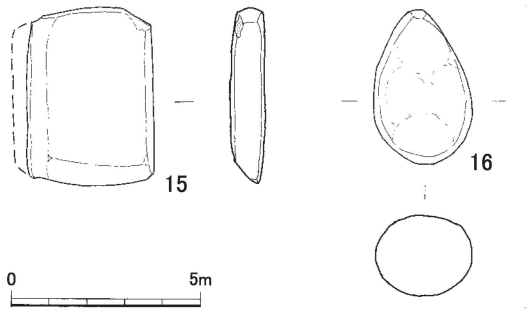


Fig.13　ピット･包含層出土遺物実測図(1／2)

１８号土坑　SK−18　(Fig. 12　PL. 5)

１８号土坑は、調査区の北東部に位置し、11号住居の床面上で検出された。平面形は、長辺が 63cm、短辺が 51cm長方形プランを呈し、主軸方位を N-24°-Eにとる。深さが 60cmの壁面は、やや緩やかに立ち上がり、西側壁と北小口壁には、上縁に緩やかな屈曲面を作っている。坑底は、中央部が浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、黒〜黒褐色土の単一層で、黄褐色粘土小ブロックがわずかに混入していた。

５．その他の遺構と包含層の遺物　(Fig. 13　PL. 6)

15 は、長さが 4.75cm、幅が 3.4cm＋α、厚さが 0.75 〜 0.83cm の扁平片刃石斧である。重さは 28.9 g。基部は欠損しているが、研ぎ直して再利用している。

16 は、涙滴形の投弾である。長さは 4.14cm、最大厚が 2.22cm、重さは 23.9g。胎土は精緻で、微細〜細砂粒をわずかに含み、焼成は堅緻。色調はくすんだ黄橙色〜黒色。

Ⅲ．おわりに

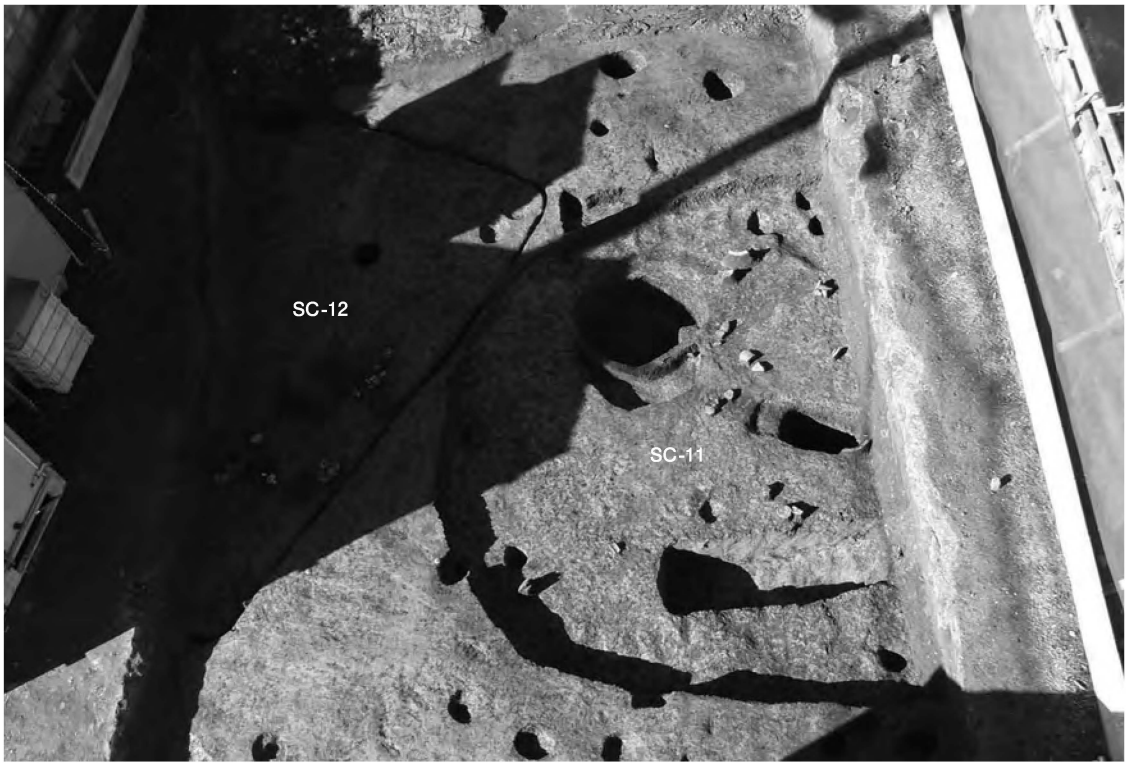
南北に長く延びる井尻Ｂ遺跡の北西縁には、西方にむかって舌状の丘陵が 60m ほど小さく突き出している。この舌状丘陵の東には北から浅い開析谷が小さく彎入している。本調査区は、この彎入する開析谷の東岸に位置し、周辺の調査例では、北東へ 80m の第 32 次調査区で弥生中〜後期の竪穴住

居や掘立柱建物、井戸が、10 次調査区で弥生～古墳時代の溝が検出されているだけで、遺跡の北部や南部で観られる鋳型や青銅器を伴う中核的集落域やそれに伴う墳墓群の展開は要として明らかではなかった。本調査区では、弥生中期後半の竪穴住居やそれに先行する大型の掘立柱建物および古墳時代初めの竪穴住居を検出した。これは第 32 次調査区例と併せて井尻Ｂ遺跡の北西縁にも該期の集落域が展開していた事の証左となるものである。同時に、調査区の狭小さからその規模は明らかでないが、大型建物の検出は中期の集落域内に竪穴住居と同時あるいは多少の時間差をおいて共立していたことを示すものである。この事は、この地域にも北部域や南部域と並ぶような中核的集落域の展開が想起されるものである。今後は、周辺域の調査事例の成果を待って井尻Ｂ遺跡内における弥生時代の集落域とそれに伴う墳墓域の展開および遺跡内における丘陵北西域の相互的関連性とその消長を検討する事が必要不可欠になろう。

Tab.1　井尻B遺跡調査一覧表

調査次数	調査番号	報告書	調査期間	所在地	調査面積(㎡)	時　代	遺構の概要	出土遺物
1	8124	111	19810924～19811017	井尻1丁目111－1外	600		土壙、溝、水溜状遺構	丸・平瓦
2	8610	175	19860428～19860531	井尻5丁目175－1	930	弥生～古墳	旧石器、弥生～古墳：掘立柱建物、土壙墓、古墳	細石刃、石核、ナイフ形石器、円筒埴輪、家形埴輪、ガラス小玉
3	9201	411	19920402～19920715	井尻1丁目293－1・2外	1,060	弥生～古墳・古代	弥生～古墳：竪穴住居、井戸 古代：竪穴住居、溝	碧玉勾玉、鉄斧、百済系単弁軒丸瓦
4	9335	412	19930906～19931014	井尻1丁目747－1	390	弥生後期～古墳前期	弥生後期～古墳前期：竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土坑	
5	9408	441	19940411～19940428	井尻5丁目171－3	130	古墳	円墳	円筒埴輪、家形埴輪、ガラス小玉、鉄剣、鉄刀
6	9501	529	19950403～19940529	井尻4丁目170・171－1	800		弥生後期～古墳初頭：住居跡、掘立柱建物、井戸跡、土壙	小型仿製鏡、銅鏃鋳型、ガラス小玉
7	9520	年報Vol.10	19959707～19950708	井尻1丁目363－2外	69	古代か	土坑	土器片
8	9667	571	19970203～19970228	井尻1丁目13番地内	113	弥生～古代	遺物包含層	
9	9745	678	19971006～19971015	井尻5丁目6－33	132	弥生後期	竪穴住居	
10	9758	678	19971217～19980124	井尻1丁目27－13	153	弥生～古墳・古代	弥生～古墳：溝　古代：掘立柱建物	百済系単弁軒丸瓦
11	9809	644	19980423～19980630	井尻1丁目13番地内	690	弥生中～古墳初	弥生中期～古墳初頭：井戸、土坑	銅矛鋳型、銅鏃、鐸形土製品
12	9865	645	19990315～19990416	井尻4丁目170－1外	125	弥生後期～古墳初	弥生後期～古墳初頭：竪穴住居、掘立柱建物、	細石刃核
13	9953	1216	19991122～19991211	井尻1丁目755－8	60	弥生後期・中世	弥生後期竪穴住居　中世：溝	弥生土器
14	9958	736	19991024～20000215	井尻1丁目13番地内	952	弥生・古墳	弥生：掘立柱建物　古墳：井戸	銅鏃鋳型
15	9965	年報Vol.14	20000114～20000128	井尻1丁目362－3	36	中世	溝	
16	0004	721	20000410～20000515	井尻1丁目729－1	132	弥生中期	甕棺墓、土壙墓、土坑	
17	0027 0090	787・834・918	20000607～20010302	井尻1丁目地内	3,657	弥生後期～古墳前期	弥生後期～古墳前期：竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土坑、甕棺墓	小型仿製鏡、小銅鐸、 ガラス勾玉・銅弋鋳型
18	0028	年報Vol.15	20000801～20000826	井尻1丁目757－3	186	弥生中期～古墳初	弥生中～古墳初：竪穴住居、井戸、貯蔵穴	刀子、石鏃、管玉、ガラス玉
19	0043	年報Vol.15	20001002～20001012	井尻5丁目12－32	133	古代か	溝	瓦片
20	0116	年報Vol.16	20010724～20010804	井尻1丁目283－1	69	弥生中・後期　古墳前期	弥生中期：土坑　弥生後期：溝 古墳前期：井戸、掘立柱建物	土器片
21	0126	788	20010907～20011105	井尻5丁目9－2外	366	弥生・古代	弥生：竪穴住居、甕棺墓、土坑、溝 古代：溝	
22	0133	923	20011106～20011205	井尻1丁目735－5	141	弥生・古代・中・近世	中～近世：掘立柱建物、土坑、溝	
23	0474	年報Vol.19	20050111～20050114	井尻5丁目163－3	22		柱穴	
24	0489	年報Vol.19	20050215～20050225	井尻5丁目163－1外	66	弥生・古代	弥生：柱穴　古代：土坑、溝 弥生前：木棺墓　弥生中：竪穴住居	
25	0613	1251	20060515～20060531	井尻1丁目754－2外	80	弥生前～中期	水田跡	
26	0629	973	20060718～20060905	井尻1丁目87番1	614	中世	掘立柱建物、土坑、甕棺墓、土壙墓	
27	0641	1136	20060821～20060902	井尻1丁目763－3外	133	弥生後期	竪穴住居、溝	弥生土器
28	0658	974	20061211～20070131	井尻4丁目170－12	241	弥生末～古墳初	弥生:土壙墓　弥生～古墳:土坑、溝	家形埴輪
29	0668	年報Vol.21	20070213～20070215	井尻5丁目175－1	87	弥生～古墳	弥生後期～古墳初頭：竪穴住居、落とし穴 古代：掘立柱建物	
30	0734	1216	20070904～20070928	井尻5丁目143－17	129	弥生後期～古墳初・古代	竪穴住居、溝	
31	0765	年報Vol.22	20080303～20080321	井尻5丁目160－6	103	弥生中～後期	竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土坑	弥生土器
32	0849	1251	20081110～20081208	井尻1丁目712番7	98	弥生中～後期	近世：溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器、 ガラス、鉄器
33	0859	年報Vol.23	20090224～20090306	井尻1丁目305番16	37	弥生・近世	甕棺墓、土壙墓、土坑、溝	土器、陶磁器
34	0924	1106	20090916～20091030	井尻4丁目815-1・822	485	弥生中～後期	弥生時代：竪穴住居、溝　古代：溝	弥生土器、土師器
35	0938	年報Vol.24	20100308～20100329	井尻1丁目764番2	61	弥生中～後期・古代	溝	弥生土器
36	1112	1217	20110701～20110819	井尻1丁目728-2	175	弥生中～古墳前期	溝	弥生土器、土製鋳型
37	1203	1218	20120417～20120712	井尻4丁目174番1・174番2	607	旧石器・古代		ナイフ形石器、丸・平瓦
38	1215	1219	20120802～20120822	井尻5丁目160番12	59	弥生	柱穴	弥生土器
39	1309	年報Vol.28	20130603～20130618	井尻4丁目172番12	57	弥生後期	弥生時代末：竪穴住居、土坑 古墳時代：溝、柱穴	弥生土器
40	1332	1252	20131111～20131218	井尻4丁目167番2	142	弥生後期末	掘立柱建物、土坑	弥生土器、土師器、ガラス小玉、碧玉剥片
41	1404	年報Vol.29	20140414～20140526	井尻5丁目331-3の一部	206	中世	弥生:竪穴住居、掘立柱建物、土坑 古墳初：竪穴住居	陶磁器
42	1434	**本報告**	20141209～20141119	井尻1丁目707番6	66	弥生後期～古墳初	井戸	弥生土器、土師器、黒曜石
43	1440	年報Vol.29	20141218	井尻1丁目294番6・294番11	51	弥生中期		弥生土器、黒曜石片

1）調査区全景（北から）



2）11・12 号住居（東から）

1）11 号住居（北から）

2）12 号住居（北から）

1）12 号住居遺物出土状況（南東から）

2）12 号住居台付鉢・小型丸底壷出土状況（東から）

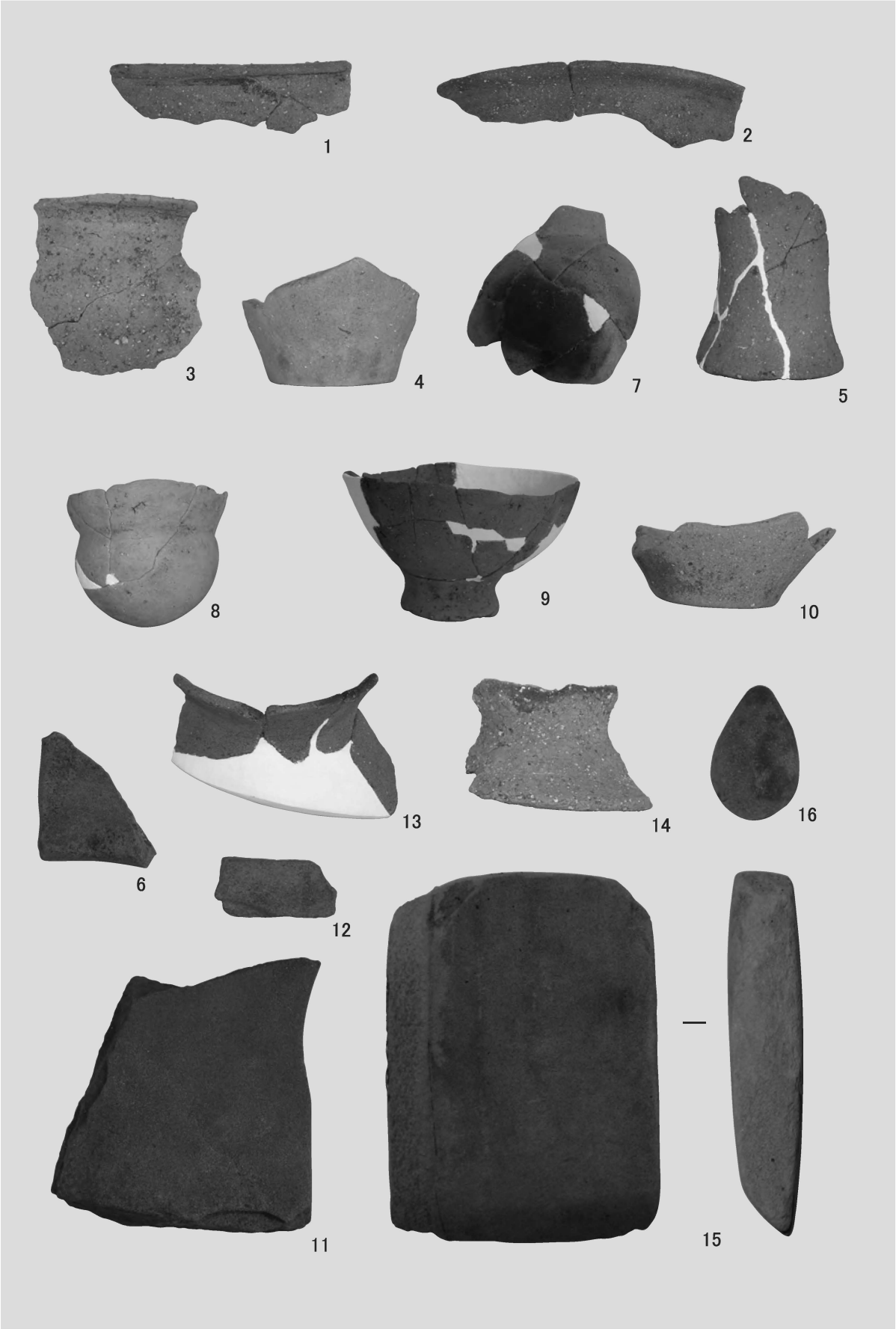
1）12 号住居甕出土状況（東から）

2）15・17・18 号土坑（北から）

1）1号建物（北から）

2）1号建物 P1 土層断面（西から）

3）1号建物 P2 土層断面（西から）



出土遺物（縮尺不同）

報　告　書　抄　録

ふりがな	いじりＢいせき
書　　名	井尻Ｂ遺跡２７
副　書　名	井尻Ｂ遺跡第４２次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1307集
編著者名	小林義彦
編集機関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2017年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
いじりＢいせき 井尻Ｂ遺跡 だい42じちょうさ 第４２次調査	ふくおかしみなみく 福岡市南区 いじりいちょうめ707ばん6 井尻一丁目707番6	40130	90	33° 33′ 17″	130° 26′ 24″	20141209 ～ 20141219	66	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井尻Ｂ遺跡第42次調査	集落	弥生時代中期 ～ 古墳時代初め	竪穴住居、土坑、ピット	弥生土器（甕、鉢、器台、高坏） 須恵器坏、滑石製紡錘車	

要　約

井尻Ｂ遺跡は、観音山に発して春日市の須玖岡本遺跡から井尻、那珂、比恵遺跡群へと続く低丘陵上に立地し、2kmほど東には、諸岡遺跡や板付遺跡がある。第42次調査区は、この井尻Ｂ遺跡の中央部西縁に位置し、すぐ南東には井尻廃寺がある。

第42次調査では、弥生時代中期の竪穴住居1棟と梁間長が2.5m、桁行長が5mの大型建物1棟、古墳時代初めの竪穴住居1棟の外に柱穴を検出した。第42次調査区では、弥生時代中期後半の円形住居1棟とそれよりも古い掘立柱建物1棟のほかに古墳時代初めの方形住居1棟を検出した。殊に、掘立柱建物の掘方は、一辺が100cmの方形プランを呈し、深さも50cmある大型ものもで、円形住居に先行するものである。立地的には、井尻Ｂ遺跡中央部の西縁に位置し、すぐ西には、北から浅い開析谷が湾入している。本調査区周辺の第7・10・15次調査区でも同期の集落域が拡がっていることが確認されており、集落域が谷際まで拡がっていることが明らかになった。また、規模は明らかでないが、該期の大型の掘立柱建物が検出されたことは、集落域内にあって何らかの重要な位置を占めていたことが想起される。

井尻B遺跡27

－井尻B遺跡第42次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告第1307集

2017年（平成29年）3月27日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷　有限会社 吉村綜合印刷

福岡市博多区博多駅前2-3-23-5階

井尻B遺跡27

―井尻B遺跡第42次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一三〇七集

二〇一七　福岡市教育委員会